

浦賀から、東海道線回りの貨車で、米原から北陸線で帰りました。家には内地を出てから全然連絡していませんでした。兄は一応兵隊に行ったが、帰ってまいりました。しかし、私の体は骨と皮だけで金火箸のようなものでした。

船は部隊一緒(第二支隊も)に乗り浦賀に上陸、満三年以上の者は皆伍長、私は三年未満なので兵長でした。また、郵便に書いて大隊長の印が捺してある善行証を復員の時にもらいました。

家に帰って体力が回復するまで、山兔をとったりしてひと冬家で遊ばせてもらい、その後金沢の印刷屋に通うようになりました。毎朝六時、一番列車に乗り八時始業、残業の時は終列車で帰ります。三カ月通いましたが、従兄に誘われ、東京台東区三輪橋の板金絞り屋へ勤めました。戦後のことで工場では洗面器や食器などを作ったのですが、そこでは三年間勤めて後、金沢の元印刷屋に帰り、昭和二十五年に結婚しました。

戦後五十年

忘れ得ぬ戦友の死

宮城県 佐々木 繁 男

私は大正十年宮城県で生まれましたので、昭和十六年徴集兵として検査を受けたのですが、現役兵でなく補充兵となりました。破竹の勢いで各地を占領した日本軍の進攻作戦が一応終了した時期の昭和十七年九月、召集令状が来しました。

入隊は予想していた仙台の連隊ではなく、新潟県の村松の部隊(東部〇〇部隊)でした。磐越西線の五泉駅で下車、当地で一泊、引率されて宮門を入りました。この村松の連隊跡には、宮門脇の衛兵立哨小屋がいまだに残っていますが、他は学校、住宅地となり、松林の中にわずかに面影を残すのみです。演習場の大日原は今自衛隊が使用し、数年前の大風水害の残骸という、山から流れ落ちた大石が、そこに草に覆われ

ており、正に『夏草やつわものどもの夢の跡』の感があります。

五十数年前の先輩たる我々に、自衛隊の下士官は話し掛け我々戦友たちも昔話をし、戦友会の帰路、村松連隊跡を訪問する時の楽しみの一つとして常に旅程表に組み入れられています。

この村松へ入隊した兵隊の出身地は、仙台師団管区の宮城・福島・新潟のほか東京・埼玉県の者たちでした。九月から十一月末までの厳しい訓練、そして秋季演習。一期の検閲が終わると、千葉県佐倉の東部第六十四部隊（歩兵第百五十七連隊）へ大挙転属になりました。自分はこれからどこへ行くのだろう。もちろん戦地であることは明白でしたが、この連隊は各方面へ兵隊を派遣する補充隊でもありました。

十二月下旬、我々は営庭に整列を命ぜられ、縦隊を幾つかに分けて、ここからここは北支、中支と指定され、私の列は南支ということになりました。三カ月間の過酷ともいえる訓練と内務班の生活で結ばれていた戦友が、列が違うために、中支、南支と別れてしまう。

人の心情も立場も一切入れられぬ、いわゆる員数で決められ、それがその人々の生死、労苦を分けたわけですから。正に天運というか、天命というか。この時から「軍隊は連隊である」という感を深くしました。

この時から、戦地で生死を共にする戦友たちが決められたのです。十二月二十日ころでしたが、早朝営庭に集合、部隊長の訓示の後、我々は徒歩で佐倉駅へ、軍用列車で東京・品川駅停車。向かい側のホームに見送りの人垣である。言葉を交わすこともできないが、親族が見送りに来た人もあつたかもしれぬが、佐倉の営門を出た時から我々は戦地の人となったような気がしました。

十二月二十五日だったか、門司港から出航。五島列島沖で船団を組んで一路東支那海へですが、当時既に敵の潜水艦は出没しており、決して安全な航海ではありません。甲板には旧式の野砲が配備され、救命胴衣は配られているが、船倉は蚕棚のように作られ、そこに我々は詰められる。船底には軍馬が。輸送船に乗っ

た経験者が話す状況はだれも同じであります。

航行中、最も大切なのは敵潜、敵機の監視でありました。何人かが交代で任務についていました。

台湾の高雄港へ寄港したのは我々の輸送船のみでした。情報によれば、敵潜水艦が出没しているとのこと、機を見て、一挙に広東へ直航とのことは後に聞いた話で、寄港中は、船上から台湾人のバナナを籠一杯五円で買って台湾バナナを賞味したという。知らぬが仏の一時を過ごしたのです。

海上には中国人のジャンク船が、茶色くなった帆をいっぱい掲げて航行している。スパイかもしれぬ、漁船かもしれぬが警戒しながらも珍しい光景を眺める。

水の色がだんだんに濁り褐色に変わる。広東湾に入り、さらに珠江を溯る。昭和十七年十二月三十一日、黄浦港着。上陸は元旦と決定しました。

我々は南支軍の独立歩兵第六十六大隊（独立混成第二十二旅団）に転属である。部隊は広東市河南地区という。輸送指揮官豊田少尉の引率のもと部隊へ着くが、

ここで各中隊に分けられる。この時から、生死を共にする文字通りの戦友が決定しました。

私は第一中隊配属、軽機関銃射手であった。中国の家は煉瓦作りが多く、兵舎もそのような建物を利用してあったが、もうここは戦地である。日本と中国は同文同種と言うが、我々には言葉は通じない。営外での住民との直接の交流は警備隊の一員となってから始まりました。訓練、警備、勤務とだんだんに慣れては来るが、隊内には二、三、四年、下士官という。我々より下の者はいない。この上下関係は十九年六月、湘桂作戦発起前の千葉からの補充兵が入隊するまで続きました。

しかし、その人たちは妻子持ちの三十数歳の人々だった。我々は本来なら三年兵、内地では神様だが、ここ戦地では、年配者の未教育初年兵にビンタも食わせられぬし、その苦しみは我々自身が丸二カ年味わっているから、そんな思いを妻子持ちの補充兵にはさせられない。結局私たちは、昭和二十一年六月復員まで、四年間初年兵であった。これは四年間苦勞し通しだと

いう愚痴を言うのではありません。その下積みの間、階級の上、下はできたが、我々戦友の絆は他の部隊の戦友より強く結ばれていて、それが今も続いているという事です。

我が部隊は独立大隊で定員八百名くらいだったといいますが、湘桂作戦で約三百名戦没しています。私の所属の第一中隊の戦没は七〇名です。その一人一人の顔は五十年経った現在でも思い浮かべることが出来ます。先輩から千葉の年配の補充兵まで、一人一人に思い出があります。その中の同郷の一人の菅原文雄君のことをお話します。これは、私自身も菅原君と同じ運命になっていたかもしれない。このような労苦は我々仲間に通ずるものであるからであります。

我が部隊は昭和十九年六月より駐屯地新会県城を、兵団の前衛とし進発し、三埠を攻撃、中隊は西江を敵前渡河し新昌を攻略し、第二次作戦で広西省梧州を攻略、さらに西江沿岸と補給路の建設に従事し、軍の柳州、南寧攻略の大動脈を保守していました。

その時の菅原君の作業の活躍ぶりは、いまだに多くの戦友の語り草となっています。持ち前の頑丈さにものを言わせ、鶴嘴や挺子を巧みに駆使し、小山のような岩盤と取り組んで切り崩す彼独特の妙技は、並み居る戦友もただ感嘆するばかりでした。彼の童顔はつい昨日のように鮮明に脳裏に焼き付いて離れません。

その群を抜いて元気な彼が、悪性赤痢と紫斑病を併発し戦列から離れたのは、昭和二十年六月の初旬でした。真夏の厳しい暑さの中で連日の米空軍の銃爆撃（P 51、P 38）不眠不休の作戦行動、補給路遮断に伴う劣悪な窮余。文字通り言語に絶する極限状態ともいえる苦渋の転戦の最中、独り望郷の念にかられながら彼は一言の繰り言も言わず非命にたおれたのであります。今思うと薬物と医療設備があれば、あの程度の病状は治癒できたでしょう。戦場のならいとは申せ、彼自身の不運というほかに、それだけになんとも惜しまれてなりません。私も悪性赤痢とマラリアで悩まされたが生き残ることができました。

私と彼の出会い、昭和十七年九月、村松の教育隊に入隊以来のことです。その後、彼が息を引き取るまで約三年間にわたり苦楽をともにし、励まし助け合った仲であります。それだけに、激戦のさなかから、どうにか彼の末期の水を汲み、ささやかな野辺の送りも済ませましたが、満足な看病も果たせず訣別したことが悔やまれてなりません。

その後、彼の遺骨の一部を、私自らの背にしての転戦を経て終戦を迎えたのでありますが、共に元気で祖国の土を踏みたかった気持ちでいっぱいでした。

私が、その十日後、激戦まれにみる百朋街や、羅漢山の戦闘で、まさに死線を乗り越えて生き延びたその陰には、常に我が背にあつて見守ってくれた戦友の霊の庇護が大きな力となったと信じています。

昭和二十一年六月、復員直後のある日、同郷の戦友近藤武夫君と連れだって、同君の霊を慰むべくご遺族を尋ねてみました。ところが、結局皮肉にも悲報を伝える使者となったのです。どんなにか彼の元氣な復員

を待ち望んでいたであろう母堂の驚き、悲しみ、一途に子息を思慕するお姿に、なんとも慰める言葉すらなく、胸をかきむしられる思いをしました。その母堂も既に今は亡い。善人まれな菅原君のことですから、その周辺には地獄は無いでしょう。当時の清純な心境で、親子ともども極楽で睦まじく暮らしていることでしょう。戦友の苦は我が苦、戦友の楽は我が楽、我が部隊史に、田中中隊長の弔辞が掲載されていますので、その一部を述べ、当時の状況を知っていただきたい。

『……当時中隊は大東亜鉄道柳州―賓陽―南寧に至る中間來賓にありて任務を遂行中なりしも大兵団担任地区を一部隊を以てするの已むなきものありて治安は刻々と悪化し独立中隊として遠く広汎なる警備は充当されありて君は当時小隊長伝令として活躍しありたり斯る状況の下に正規軍の反抗と土民軍の蜂起は交通連絡線を遮断し補給困難に陥りて文字通り空室清野のさなかにて自存するのやむなきに至れり六月二日より六日にわたる敵一ヶ団及雜軍凡そ七〇〇の來賓奪回の

攻防は君と共に中隊全員の忘るべからざる日なるべし
当時既に君は大腸を病みてありたるも病室の中にあり
蹶起せんとする姿未だ中隊長の心中を去来しあり貧劣
なる給養と不良なる水質は一般の健康を著しく低下せ
しめたるも補給意にまかせず患者後送の便乏しく激甚
なる任務に追われありたるものなり斯くてやむなく隊
治療を続行中病勢は悪化の一路を辿りたりその間玉碎
を賭せる中隊決戦防衛はよく反抗を破摧阻止せるも敵
は急遽桂林地区を奪取我が軍の背後をつかんとせり之
がため北上阻止の任を以て中隊また死守せる来賓を去
る日、君を柳州に後送君が回復し速かなる追及を念願
せるものなり蓋し六月十一日のことなり凶らざりき
翌十二日担送半ばにして病勢一変し永別せんとは君は
赤痢と紫斑病を併発し一七時三〇分牛岩郷周村付近に
て病没せり

明けて十三日君は部隊本部大灣墟に運ばれ荼毘に附
せられたり爾来激烈なる作戦行動間と雖も常に戦友の
胸に抱かれ中隊長と共にありき

今や終戦を宣せられ祖国の興亡と命を同じくし大命

のまにまに痛恨なる大陸の地を去るの日皇国の前途
愈々多難なるものあり然れども君が素志は新興日本の
礎として同志の胸中に永遠に生きてあらん安らげく眼
れかし

我々興国の先駆となりて明日の闘志を誓わんとす思
いて茲に至り遺族の方々の胸中を推察すれば心断腸た
るるも意つくす事能はず翼くは諒とせられんことを
ここに謹みて哀悼の微衷を捧ぐ

独立歩兵第六十六大隊第一中隊長

田中正巳

私の戦争体験記

静岡県 松本 久

昭和十七年八月中旬、春野町小学校講堂において徴
兵検査を受けた結果、甲種合格となりました。昭和十
八年四月一日、三重県久居町（現久居市）にありまし
た中部三八部隊に入営、第五中隊松田隊に配属され、